

研究主題

「持続可能な社会の形成者として必要な能力や資質の育成」 ～教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を通して～

研 究 部

1. ESDの研究をはじめるとあって

(1) これまでの研究の流れ

本校では平成 21 年度より、現行の学習指導要領の全面実施を念頭においた研究を行ってきた。その研究の中では言語活動を重視した「思考力」の育成に着目し各教科等において実践・検討を行ってきた。平成 24 年度には「思考力を育む指導と評価」をテーマに、各教科等の学習活動において重視したい思考力に着目し、言語活動を通じた実践に取組、議論を積み重ねてきた。

そこでまず本校では「思考力」について大きく 2 つに分けて考えた。ひとつは、教科の目標に関係した「思考力」であり、もうひとつは、知識・技能の活用に必要な「思考力」で、こちらは既習の知識・技能をどう扱うかなど、思考の方法（スキル）といえる。これらの思考力のうち、平成 24 年度の研究では、後者を意図してその育成を研究の重点として取り組んだ。各教科等において「思考の場面」「どのように指導するか」「よりよい学習活動を構築するための形成的評価」などを意識しながら授業を組み立て、テーマに迫ることをめざした。具体的には、「思考・判断の型の工夫」、「形成的評価の工夫」、「評価の共有の工夫」、「思考の可視化の工夫」などの学習活動における教師の指導・評価に焦点を当て、精察した。

それらの検証を踏まえ、平成 25 年度には研究テーマを「課題を解決するための思考のあり方について ～よりよく思考するための手立ての工夫～」と新たに設定し、これまで取り扱った「思考力」の中から特に「課題を解決するために必要な思考力」を新たに限定し、各教科等における課題の設定の在り方や「思考の型 = 課題を解決するために使った考え方」の在り方について検討・実践を行った。具体的な内容として、課題を解決するために必要な思考力を育成するために、「思考の型」を取り入れた研究・実践を行ってきた結果、各教科等に共通して活用できる思考のプロセスがいくつか見られ、指導の工夫に生かすことができた。しかし課題として、教科の枠を越えた全体的な学習を包括するような「思考の型」や「思考するための手立て」にまでは研究が及ばなかったということが挙げられた。そこでこの課題を踏まえ、各教科等において取り組んできた「思考の型」や、「思考するための手立て」の結果、思考力がどのように高まったか、検証・分析や、各教科等における「思考の型」や「思考するための手立て」の統合などにより、思考力を育成する学校全体の取組をさらに深めていく必要性を感じた。

その上で、今日の我が国の現状を加味して研究の方向を考えたとき、設定する学習の課題について、より生徒の生活の中にあり、問題解決的な思考力が必要とされるようなものが適切であると考えた。そのような学習内容の工夫を図るためには、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点に立った学習指導で、これまでの「思考力の育成」に関する本校の研究の成果を生かすことが出来るのではないかと考えた。今後、ESDに関する学習指導を推進していくためにも、今まで取り組んできた実践事例を生かし、思考力の育成を研究計画の中に取り入れていくこととした。

(2) 本校の教育目標と研究

本校では今年度新たに教育目標を「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する」と定めた。これはE S Dが求める人間像「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う」と大きく関わっている。

本校では育成すべき具体的な生徒像として、「自ら考え学ぶ生徒」「お互いに認め合い、助け合う生徒」「心身ともにたくましい生徒」の3つを定め、教育目標の具現化に努めているが、これは国立教育政策研究所がE S Dに関して提唱する「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」と深く関連している。更に、前述のように本校では、特に「問題を解決するための思考」について、各教科等において思考力を育む場面や方策について探求してきた。これはE S Dが求める「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」の基盤になると思われ、学習指導要領が求める思考力・判断力・表現力等と大きく関係している。

E S Dに関しては、中等教育では教科間のつながりや関連を意識した取組やホールスクールアプローチなどの実践例が少ないように思われる。

以上のように、本校の生徒像とE S Dとの関係を意識化し、E S Dの概念に基づく学習内容と、各教科等の思考力・判断力・表現力等との関連を明らかにすることを研究の中心とした。初年度はまず、これまでの「問題を解決するための思考」についての研究成果をE S Dの概念に根ざした形で活用し、教科間の関連やつながりに焦点をあてて単元・題材や課題、表現方法の工夫を行う。以降は1年目の研究実践の積み重ねをもとに、総合的な学習の時間など教科外の活動でもE S Dの概念に基づく学習活動の実践に取り組んでいくことで、持続可能な社会の構築のために行動できる生徒の育成や本校が目指す生徒像の具現化を図りたい。

2. E S D (Education for Sustainable Development ; 持続可能な開発のための教育) について

本校は、研究を進めるにあたって、国立教育政策研究所のE S Dの研究指定を2年間受けることになった。そこで、平成24年3月に国立教育政策研究所が発行した「学校における持続可能な発展のための教育(E S D)に関する研究〔最終報告書〕」や、それに基づいて作成されたリーフレット(以下、「リーフレット」と記載)をもとに、本校の研究の骨子を組み立てた。

(1) E S Dについて

E S Dとは何か、ということに関しては、リーフレットに次のように書かれている。

E S Dとは、環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点から、より質の高い生活を次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる開発や発展を目指した教育であり、持続可能な未来や社会の構築のために行動できる人の育成を目指しています。

また、E S Dを学校教育で進めるためには各教科等の授業を通しての学習が前提であり、E S Dの視点に立った学習指導の目標として次のように書かれている。

教科等の学習を進める中で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

ESDの定義については様々な表現が存在するが、本校では国立教育政策研究所のリーフレットの表現に即し、そこに記されている目標の達成にむけて取組を行うつもりである。

(2) ESDの範囲について

ESDの範囲について、リーフレットには、「環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点」とあり、環境、経済、社会・文化といった分野を取り上げている。一方、文部科学省内の日本ユネスコ国内委員会はESDに関連する分野としてより具体的に、環境、国際理解、エネルギー、防災、生物多様性、気候変動等を取り上げている。しかし、こうしたESDに関連する分野・内容については各国や諸団体によって様々な解釈がなされ、多岐に及んでいるのが現状である。本校においてはESDの範囲について、前述のESDの視点に立った学習指導の目標にある「持続可能な社会づくりに関わる課題」を見出すことができる学習内容であることを前提としながら、特定分野に限定せずに幅広く弾力的に捉えていく必要があると考えている。

(3) ESDと従来の教育との違い

前述のようにESDの範囲は多岐に渡り、関連する分野である環境教育や防災教育、国際理解教育等は決して真新しいものではない。これらは従来から個別に取り組みされてきた教育活動である。ESDでは、こうした様々な分野の教育に対して、次の2点が大きな特徴といえる。

①「持続可能な社会づくり」という共通の目的を与えること

②様々な分野の教育活動を関連付け、つながりを持たせながら総合的に取り組むこと

これにより、従来の教育と学習内容そのものは大きく変わらないが、ESDという一つの方向性が与えられることで学習内容に対する解釈がESDの視点を踏まえたものになってしまう。このようにESDでは学習内容の捉え直しが重要となるのである。

(4) ESDの視点に立った学習指導

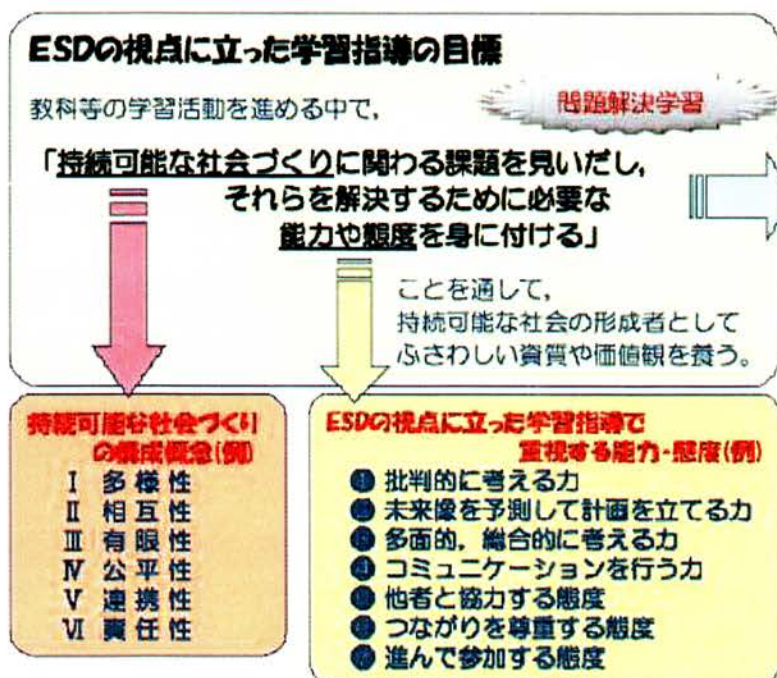
①持続可能な社会づくりの構成概念

ESDの視点に立った学習内容の捉え直しにおいて、「持続可能な社会づくり」と学習内容との関連付けは非常に重要である。その際、「持続可能な社会」がどのような要素から成り立ち、どのような行動や考え方に基づくものなのかという理解が必要となる。これについて、リーフレットには「持続可能な社会づくりの構成概念(例)」が示されている(図1)。この概念は「人を取り巻く環境に関する概念」「人の意志・行動に関する概念」から成り、それぞれ3つの下位概念が存在している。これらの構成概念が学習内容にどのように当てはまるかを考え、解釈することで、学習内容にESDの視点が与えられ、「持続可能な社会づくりに関わる課題」を明らかにした学習指導が可能となる。

②ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度

前述のようにESDは「持続可能な社会づくり」を軸とした様々な教育分野の総合的なつながり

によるものである。そのため、「持続可能な社会づくり」に関わる課題は高度なものとなり、その解決にあたっては基礎的・基本的な知識や技能を活用する思考力・判断力・表現力等や、学習したことを実生活・実社会において実践する態度等の育成が求められる。リーフレットにはこうした重視すべき能力・態度として7つの例が示されている（図1）。学習内容を捉え直す際は、指導目標の中にこれらに関連付けることも必要となってくる。特に教科等を中心とした学校教育のなかでESDを行うためには、こうしたESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度と、各教科等の「思考力・判断力・表現力等」に関する学習目標との間どのような関連があるかを明らかにすることが重要である。



(図1) リーフレットより

(5) 3つの「つながり」

ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項として、リーフレットでは以下のように3つの「つながり」について述べられている。

・教材の「つながり」

教材を内容的・空間的・時間的につなげること

・人の「つながり」

学習者同士、学習者と他の立場・世代の人々、学習者と地域・社会などをつなげること

・能力・態度の「つながり」

身に付けた能力・態度を具体的な行動に移し、実践につなげること

これらの3つの「つながり」は相互に関連付けられたものであり、様々な分野を総合的に学習するESDにとって重要な考え方である。

3. 研究テーマと研究方針について

(1) 研究テーマの設定にかかわって

さて、ESDに関わる研究は、様々な先行研究がなされているが、その多くは総合的な学習の時間を中心とした実践である。それは、各教科等を実践の中心とすることの難しさを物語っている。実際にESDの先進校に学ぶと、以下の2点の問題点が考えられた。

①各教科等がそれぞれ独自に研究を進めると、それぞれの実践が繋がらず、学校全体として目指す方向があいまいになる。

②各教科等でESDの内容に直接関係ないと思われる教科が、能力や資質の育成に重点を置く方向

に進み、その結果、内容的にE S Dと関係ないものを扱う方向に進んでしまう。

しかし本校では、各教科等の方向から、学校全体で1つの取組になるように研究を進めることを目指した。そこで、「教科間のつながりを目指したカリキュラムの開発」を研究の1つのゴールとして設定することで、各教科等が共通の目標を持ち、まとまった研究ができるのではないかと考えたのである。以上のことから、研究テーマを

**「持続可能な社会の形成者として必要な能力や資質の育成」
～教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を通して～**

と設定し、教科間のつながりを考えることを前提とし、研究を進めることにした。

(2) 研究の経緯と基本方針の策定

教科間のつながりを目指したカリキュラムを開発するために、前述の3つの「つながり」のうち、今年度は特に教材の「つながり」に重点を置くことにした。教材の「つながり」とは、内容的・空間的・時間的な「つながり」のことであり、各教科等において、他の教科等とつながることが出来る教材を探すことから始めた。そのため、(図2-1、図2-2)のように各教科等の年間指導計画を貼り出し、どの教科等とつながりを持つことが出来るか書き出したり、(図3)のように、各教科の教科書をいつでも閲覧出来るようにした。



(図2-1) 各教科等の年間指導計画を張り出したもの



(図2-2) つながりを持ってそうな書き込み



(図3) 資料コーナーと教科書コーナー

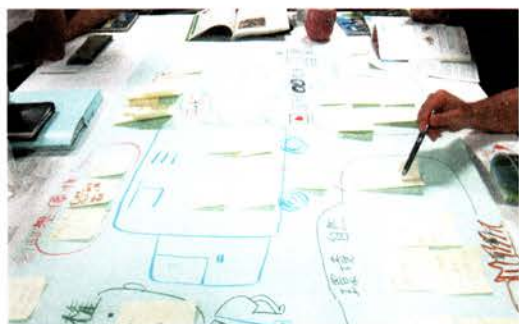
さらに、(図4-1, 図4-2, 図4-3)のように、教材の「つながり」を模索するワークショップを3回開催し、各学年を中心に、それぞれの教科等がつながることが出来る内容を話し合った。



(図4-1) ワークショップの様子



(図4-2) ここでは江戸プロジェクトができないか話し合っている。



← (図4-3)

アイデアを付箋に書き、模造紙に貼ってグループ化していく。

しかし、能力や資質の育成よりも先に教材の「つながり」を模索した結果、「何を目的に授業を行うか」という疑問が生じてきた。そこで、各教科等の思考力・判断力・表現力等を育成することを最終的な目標とすることを再確認した。また、能力や資質の育成に関わって、今年度はESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の①～⑦のうち、教科等の思考力・判断力・表現力等と関わりの深い①～④に焦点をあて、能力・態度の「つながり」を意識して、それを次年度へつなげていくことにした。

以上のことから、研究の基本方針をまとめたものが以下の表である。

基本方針…教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を目指して、教材の「つながり」を重視した取組を行い、各教科等の思考力・判断力・表現力等との関連性を明らかにする。

教科間のつながり…最初は教材の「つながり」から、最終的には能力・態度の「つながり」へ
教材の「つながり」…内容的・空間的・時間的な「つながり」

能力・態度…ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度

カリキュラム開発…カリキュラムマップ

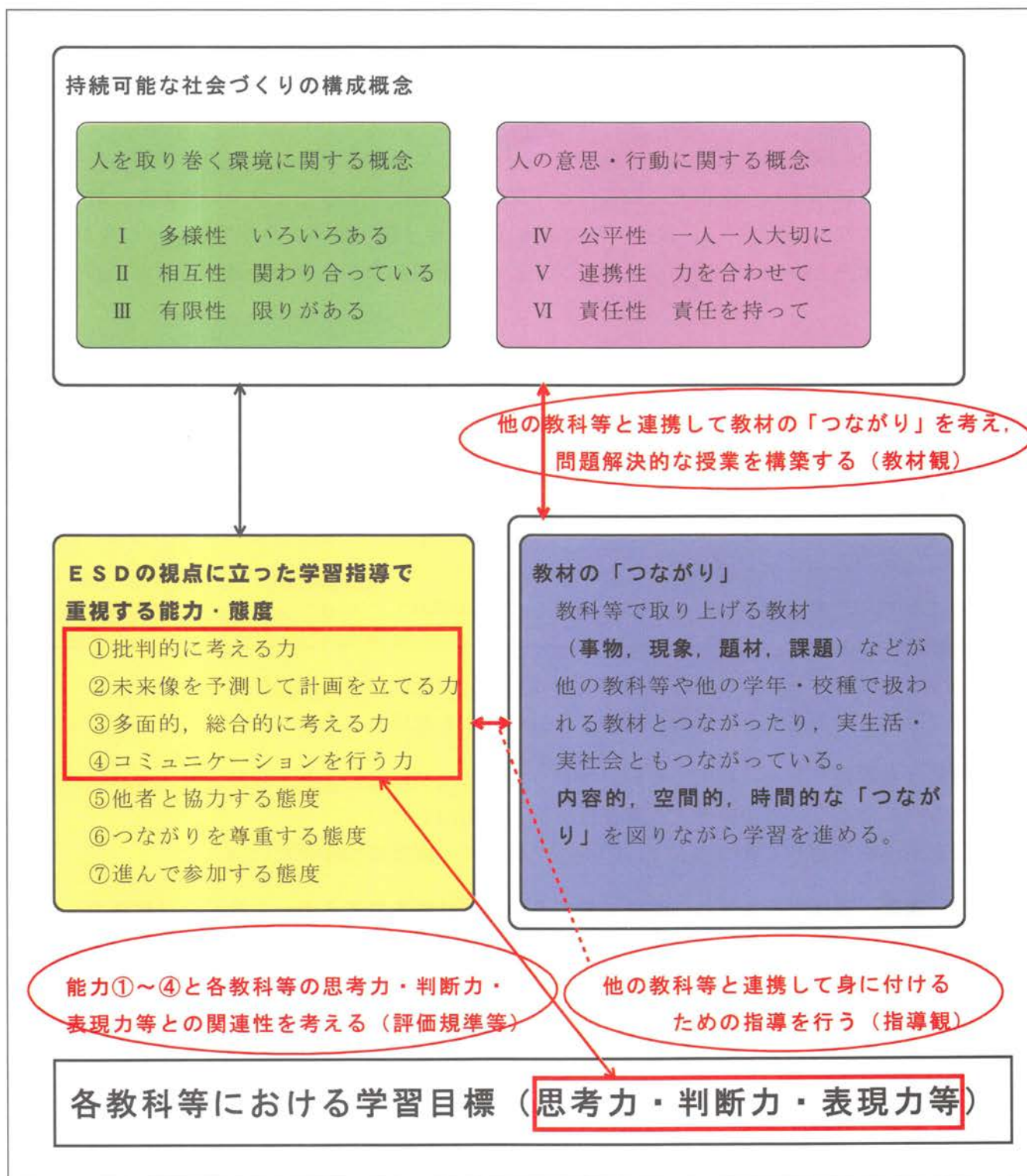
(1年目:教材の「つながり」 2年目:能力・態度の「つながり」)

教科等の思考力・判断力・表現力等との**関連性を明らかにする**

…教科等の目標や評価規準にある思考力・判断力・表現力等と「能力・態度」との関連性を考え、教科等で思考力・判断力・表現力等を身に付ける研究を行ってきた成果を生かし、能力・態度を身に付ける指導の在り方を考え実践する。

4. 授業の構築について

実際の授業の構築の仕方については、基本方針に基づいて、次の（図5）のようにまとめ、教員の共通理解を図った。



（図5）授業の構築のポイントと流れ

持続可能な社会づくりの構成概念Ⅰ～Ⅵに基づいて、他の教科等と連携しながら教材の「つながり」を考えた問題解決的な授業を構築し、その授業で身に付けたい能力・態度①～④と各教科等における学習目標（思考力・判断力・表現力等）との関連を考え、他の教科等と連携して身に付けるための指導を行うのが、基本的な流れとなる。そしてどのような考え方でその流れをつくったか、学習指導案における目標（評価規準等）、教材観、指導観、生徒観に記載することにする。

また、教材の「つながり」については、次のようにリーフレットにも記載されている。

教材（事物・現象・題材・課題）が、他の教科等や他の学校種・学年で扱われる教材とつながっていることや、実生活や実社会とつながっていることに気づき、それらについて関心や認識を持つこと、さらにはそれらを相互に関連付けて見たり考えたりすることが大切であり、教材や各教科等の内容的な「つながり」、教室・学校と地域・社会・国・世界との空間的な「つながり」、過去・現在・未来といった時間的な「つながり」などを図りながら学習を進めることが必要である。

この、教材の「つながり」については、平成 23 年 3 月に国立教育政策研究所が発行した「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究[中間報告書]」や、平成 24 年 3 月に国立教育政策研究所が発行した「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究[最終報告書]」の各実践例にも詳しく記載されており、そこから、事物・現象・題材については明確な区別はなく、ある教科で取り扱ったことが、他の教科でも出てくるような内容で、お互いの教科の力につながっていくことが大切であることが分かる。

以上のことから、実践の中心としていく例として、以下のものを挙げ、教員の共通理解を図った。

（実践の中心としていく例）

社会でハンガーマップについて学習し、家庭で食材の無駄を減らす調理実習を行う。
英語でそれらに関連する読み物を読み、自分の考えを発信していく。

食料には**有限性**があり、各国で食料が足りている状況ではないことを理解させ、食材の無駄をなるべく出さない方法を考え、**責任性**を持って発信していく。

（②未来像を予測して計画を立て、⑦進んで参加する態度につなげたい。）

社会、家庭、英語でそれぞれ「②未来像を予測して計画を立てる力」と教科の「思考力・判断力・表現力等」との**関連性を明らかにしていく**。初年度は能力・態度の「つながり」よりも、教材の「つながり」を重視する。よって、教科の目標によっては、②や⑦以外のものをとりあげることも可能。

5. カリキュラム開発について

カリキュラム開発については、実践したものや、実践予定のものを「カリキュラムマップ」の形にまとめていくことにした。本校の研究における「カリキュラムマップ」とは、内容的な「つながり」を重視したもので、必ずしも時系列で並んだものである必要はないと考えている。次ページに、現在作成途中のカリキュラムマップを示す。

カリキュラムマップ

	1年												2年												3年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ミ	●技「技術の進展と社会の変化」(環境保全)												●英「If You Wish to See a Change」												●英「The 5Rs to save the earth」											
環境学習	●国「江戸からのメッセージ」 ●技「設計」(リサイクル)												●社「九州地方」 ●家「よりよい衣生活」(5R)												●家「食生活と自立」(エコ・クッキング) ●社「わたしたちの生活と文化」											
	●英「リサイクル活動」 ●数「方程式」(ゴミの量、エコキャップ)												●理「天気」												●理「地球の運動と天体の動き」											
環境・自然	●社「世界各地の人々の生活と環境」												●社「日本の気候」												●理「地球の運動と天体の動き」											
	●国「大根は大きな根」 ●社「世界各地の人々の生活と環境」												●国「流水とわたしたちの暮らし」 ●社「南アメリカ州」 ●保体「健康と環境」(ゴミ処理)												●理「発光ダイオード」 ●英「If You Wish to See a Change」 ●国「モアイは語る」 ●社「明治維新」(足尾銅毒事件) ●家「よりよい衣生活」(オーガニックコットン)											
生物多様性	●理「植物のくらしとなかま」 ●技「世の中で求められる製品をつくろう」(間伐、ウッドマイルレージ)												●社「世界と日本の資源・エネルギー」												●数「関数 $y=ax^2$ 」(二酸化炭素の排出量) ●社「流通」 ●理「環境と人間」											
	●理「いろいろな物質とその性質」												●理「消化」												●国「月の起源を探る」											
エネルギー学習	●理「植物のくらしとなかま」												●社「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」 ●理「動物の進化」 ●国「やさしい日本語」 ●国「気になる「あの人」を探ろう」												●数「確率」(女子が生まれる確率) ●理「生物のふえ方と遺伝」											
	●保体「呼吸・循環の働き、生殖の働きの発達」												●社「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」 ●理「化合と分解」 ●数「一次関数」(水の温度の上がり方) ●理「電流と磁界」 ●技「エネルギーの有効利用」(白熱電球とLED)												●家「よりよい消費生活」(グリーンコンシューマー) ●社「国際問題とわたしたち」 ●家「住生活と自立」(快適な住まい) ●理「いろいろなエネルギーの移り変わり」 ●理「エネルギー資源とその利用」 ●英「Clean Energy Sources」											
防災学習	●理「活きている地球」												●社「九州地方」												●理「災害と人間」											
	●数「比例」(地震・P波とS波)												●社「世界から見た日本の自然環境」 ●保体「傷害の防止」(自然災害への備えと避難)												●家「住生活と自立」(安全な住まい)											
地域文化財学習	●社「文明のおこりと日本の成り立ち」												●社「近畿地方」 ●音「箏」												●家「食生活と自立」(郷土の食文化) ●理「仕事とエネルギー」											
	●家「食生活と自立」(日本食) ●音「民謡」 ●音「箏」												●国「五重塔はなぜ倒れないか」 ●音「歌舞伎」 ●美「鑑賞」(仏像)												●英「Volcanoes in Japan」 ●社「わたしたちの生活と文化」 ●国「俳句の可能性」 ●音「能」 ●国「夏草」 ●音「箏」											
国際理解学習	●数「方程式」(和算)												●保体「体育理論」(スポーツの歴史と役割)												●理「原子、分子」 ●英「Let's Talk about Things Japanese」											
	●英「国際フードフェスティバル」 ●音「箏」												●社「ヨーロッパ人との出会いと全国統一」 ●数「平行と合同」(和積) ●音「箏」												●社「わたしたちの生活と文化」 ●国「俳句の可能性」 ●音「能」 ●英「What is the Most Important Thing to You」											
平和学習	●社「世界各地の人々の生活と環境」												●音「オペラ」 ●英「So Many Countries So Many Customs」												●音「ブルババ」 ●英「Faithful Elephants」											
	●社「古代国家の歩みと東アジア世界」 ●英「Mike's Visit to Washington, D.C」 ●保体「武道」(柔道)												●国「アイスプラネット」 ●国「漢詩の風景」 ●社「明治維新」 ●家「衣生活と自立」(世界の衣服) ●保体「武道」(柔道)												●国「蝶の声、挨拶」 ●社「日清・日露戦争と近代産業」 ●社「第二次世界大戦と日本」											
人権学習	●国「大人になれなかった弟たちに……」 ●美「鉛筆表現」(おとなになれなかった弟たちに……)												●美「木版」(ジャポニズム)												●社「国際社会と世界平和」											
	●技「便利で危険なネットワーク」(情報モラル、著作権)												●家「家族の役割」(子どもの人権)												●社「人権と日本国憲法」 ●社「人権と共生社会」 ●社「これからの人権保障」 ●美「テーブカッター」(ユニバーサルデザイン) ●家「商品選択と購入」(フェアトレード・容器リサイクル法)											
貧困学習	●技「世の中で求められる製品をつくろう」(ユニバーサルデザイン)												●社「世界から見た日本の人口」												●英「Mother Teresa」 ●社「国際問題とわたしたち」											
	●社「アフリカ州」												●社「欧米の進出と日本の開国」												●家「家族・家庭と子どもの成長」(地域生活)											

6. 生徒アンケートの実施

5月、11月に同じ項目で、能力・態度に関するアンケート調査を行った。ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度①～⑦に対応する形で、次のようにアンケート項目を考えた。

①批判的に考える力

- 1 テレビやインターネットなどマスメディアで報道されることは正しい情報である。
- 2 他者の考えと自分の考えが違うとき、前向きな別の案を考え説明することができる。

②未来像を予測して計画を立てる力

- 3 将来どうなるかを予想するためには、現在の自分の行動を見直すことが大切である。
- 4 集団で活動する計画を立てるとき、他者の意見を聞いて協力しながら計画を立てることができる。

③多面的、総合的に考える力

- 5 自分の生活には、他者の考えや社会のしくみ、自然や環境が必ず関わっていると思う。
- 6 いろいろな人の考え方や社会との関わり、自然とのつながりなどを考えて、自分の今の行動を見直すことができる。

④コミュニケーションを行う力

- 7 自分の考えを人に伝えたり、他者の考えをよく聞いて、自分の考えに人の考えを取り入れていくことは大切なことである。
- 8 他者の気持ちや考えを尊重し、自分から積極的なコミュニケーションが行える。

⑤他者と協力する態度

- 9 さまざまな価値観をもつ他者の立場に立ち、他者の考えに共感した「交流」が大切である。
- 10 他者と協力・協同してものごとをすすめることができる。

⑥つながりを尊重する態度

- 11 自分が生活する上で、多くの人や地域、社会、文化、自然とつながりを持ちたいと思う。
- 12 自分が今生活できているのは、今までの伝統や地域の文化、他者や自然のおかげであることに感謝できる。

⑦進んで参加する態度

- 13 集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、人との約束は守らなければならない。
- 14 集団における自分の役割を理解し、ものごとに主体的に参加できる。

奇数番号は 次のように4段階で自分の考えを、

1 強く思う 2 そう思う 3 そう思わない 4 まったく思わない

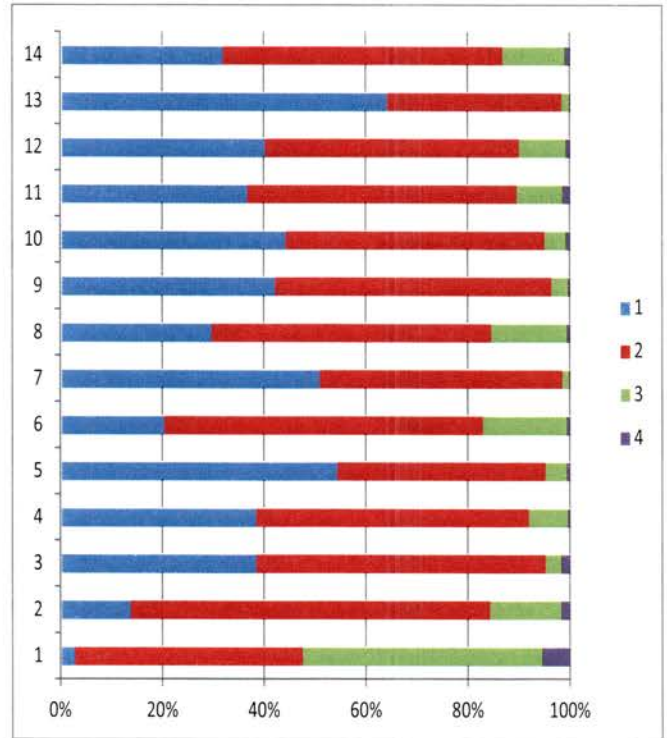
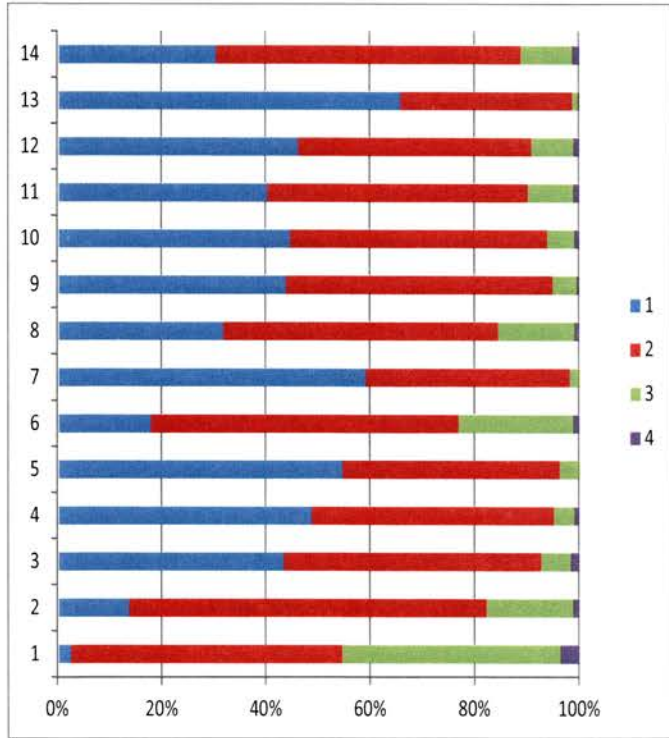
偶数番号は 次のように4段階で自分の行動について答えてもらった。

1 いつもできる 2 ときどきならできる 3 あまりできない 4 できなかった

アンケートの結果を次ページに示す。

5月27日実施

11月28日実施

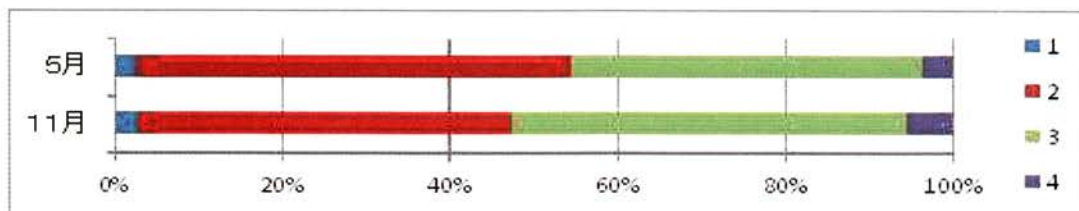


7. 研究の成果と課題

(1) 成果

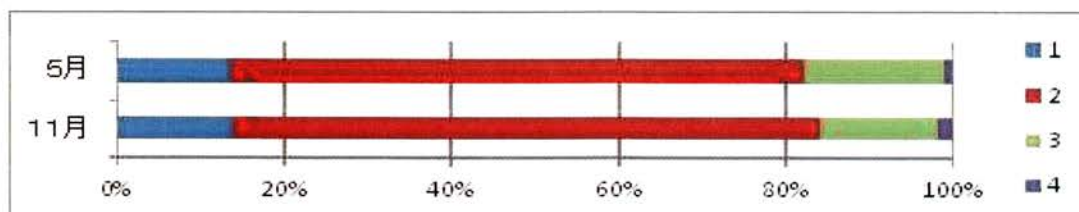
- ・生徒アンケートの結果から、「批判的に考える力」や「多面的・総合的に考える力」については、それらの力を用いようとする生徒が増えている。(5月と11月との比較より)

1 テレビやインターネットなどマスメディアで報道されることは正しい情報である。



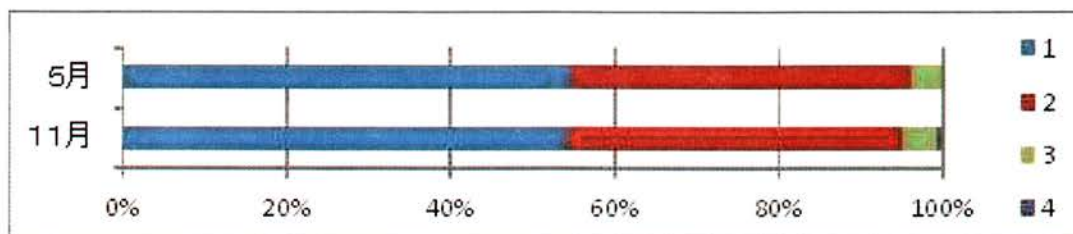
情報はいつも正しいとは限らないと判断する生徒が増えている。

2 他者の考えと自分の考えが違うとき、前向きな別の案を考え説明することができる。

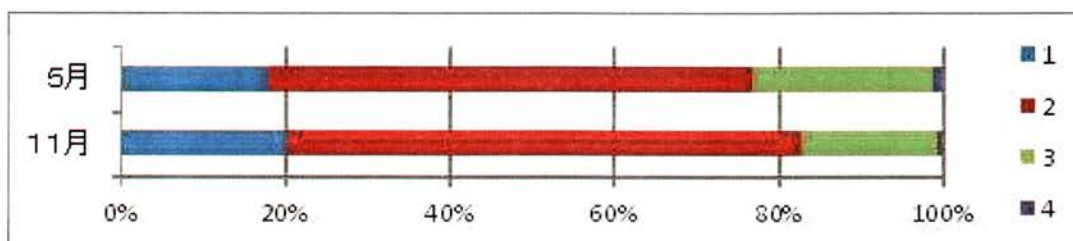


若干だが、「2 ときどきならできる」生徒が増えている。

5 自分の生活には、他者の考えや社会のしくみ、自然や環境が必ず関わっていると思う。



6 いろいろな人の考え方や社会との関わり、自然とのつながりなどを考えて、自分の今の行動を見直すことができる。



5についてはほとんど変化はないものの、6については、いろいろな関わりやつながりを考えて、今の自分の行動を見直すことが「1 いつもできる」「2 ときどきならできる」生徒が増えている。

・生徒はESDについて「身近なことから実践したい」というコメントをアンケートに多数(296名)書いており、持続可能な社会の形成に向けて関心や意欲をもち始めていることが分かる。

数字のレポートで、他者をも見てみると、あたり前のことだけど、自分は出来ていないな、と思うような例は、こまめに電気を消したり、冷蔵庫を開けっぱなしにしないとか、自分で考えたこと以外も、できるような気がしたい。これからはもっと意識していこう、と思った。

リサイクルなど環境により取り組みを行う。紙やマッドボールなどはしっかりリサイクルできると思うから、できることだと思ふ。

・教材の「つながり」については、教科間で連携しようとする職員の意識が向上した。また、複数の教科間で連携し、ESDを題材とした具体的な授業実践を試みることができた。

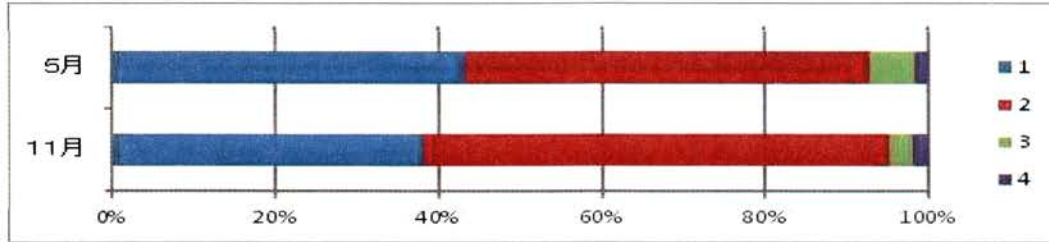
<職員アンケートの記述より>

教員間で、お互いの授業について垣根なく情報交換することができてよかったですと思います。教員が教科を越えてつながり、協力する姿勢や行動は、生徒にも伝わり、見えないところでよりよい人間関係の醸成につながるのではないかとも思いました。

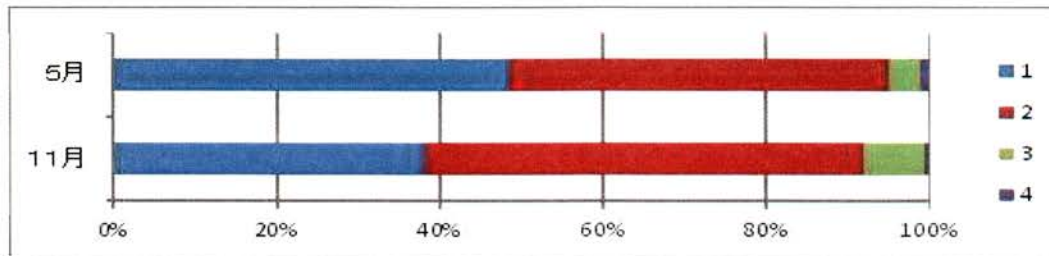
(2) 課題

- 生徒アンケートの結果から、「未来像を予測して計画を立てる力」や「つながりを尊重する態度」については、ESDに関する学習が進むにつれて、難しさを感じている生徒が多くなっている。(5月と11月との比較より)

3 将来どうなるかを予想するためには、現在の自分の行動を見直すことが大切である。

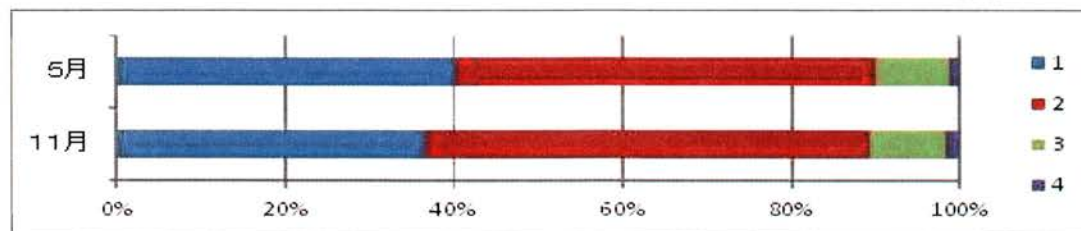


4 集団で活動する計画を立てるとき、他者の意見を聞いて協力しながら計画を立てることができる。

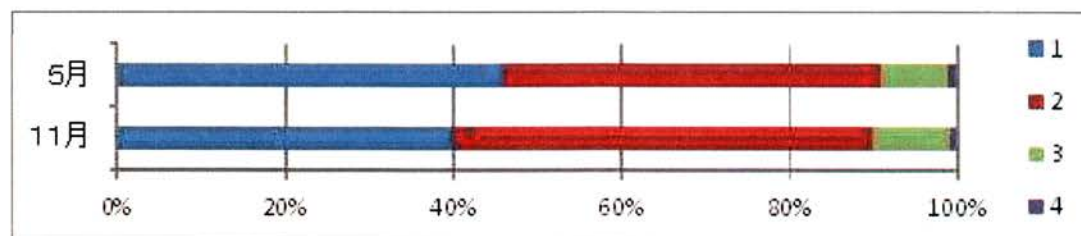


将来どうなるかを予想するために現在の行動を見直すことが大切であることを「1 強く思う」の割合が減っている。また、他者の意見を聞いて協力しながら計画を立てることができる割合が減っている。ESDの学習を進める中で、将来どうなるかを現在の行動と結びつけて考えたり、計画を立てたりすることの難しさを感じ始めているのではないかと考えられる。

11 自分が生活する上で、多くの人や地域、社会、文化、自然とつながりを持ちたいと思う。



12 自分が今生活できているのは、今までの伝統や地域の文化、他者や自然のおかげであることに感謝できる。



いろいろなつながりを学習する中で、特に「地域」「文化」といった言葉が入ると、それらと

つながりを持つことの難しさを感じているのではないかと考えられる。

- ・生徒にESD＝環境というイメージが定着している感があり、実践していこうという内容も、環境に関する事柄が多い。(296名中199名)。今後、実践の分野を広げていく必要がある。

世界では資源が減ってきていたり、木が減ってきていたり、環境の悪化が急激に進んできているということ。そしてその原因には私たちの生活や日常にあることが多くある。

買い物をするとき環境に気をつける。

世界では、地球温暖化や砂漠化などといった大きな問題が起きているので、自分ができることは、調べてとりくんでいきたい。夏休みが終われば、ECOフェスティバルのよう、あるいは定期購読というように決めること、意識してとりくめたいと思う。(例えば、エコバッグを使う、水筒などを持参する、など)

- ・各教科等の思考力・判断力・表現力等が、ESDの中でどのように関わっているか、全体での共有がなされていない。
- ・教科等の思考力・判断力・表現力等が、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度にどうつながっていくか、見えていない。

(3) 次年度へ向けての取組

以上の課題を踏まえ、特に次年度は以下の2点について重点的な取組を行う。

〈能力・態度のつながりをはかること〉

- ・本校の教育目標や、目指す生徒像に迫るように、各教科等が分担する「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を整理する。各教科等の思考力・判断力・表現力等と能力・態度のつながり、さらにはそれを全体でどの教科がどの部分を分担しているか、整理し共有する必要がある。各教科等が協力して、持続可能な社会の形成者として必要な資質や能力の育成にあたる。

〈よりよいカリキュラムマップを作成すること〉

- ・能力・態度を位置付けることも含めて、分かりやすく、使いやすいカリキュラムマップを目指す。現在のものは考えられる内容を全て羅列したために情報が多すぎて見づらいため、次年度は実際に実践可能なものを精選し、よりよいカリキュラムマップの作成を目指す。